

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 28 年 8 月 25 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 教務補佐員

氏 名 栗 田 和 紀

助 成 の 種 類	平成28年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第8回世界爬虫両棲類学会議 The 8th World Congress of Herpetology		
発 表 題 目	シナトカゲの分類のレビュー, 並びに, 分子と形態形質に基づく台湾産2亜種の再検討 Taxonomic review of Chinese skink (<i>Plestiodon chinensis</i>) and a reassessment of two subspecies in Taiwan by molecular and morphological investigations		
開 催 場 所	富春江励駿酒店 (中華人民共和国, 浙江省, 杭州市)		
渡 航 期 間	平成 28 年 8 月 15 日 ~ 平成 28 年 8 月 21 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として, A4版2000字程度・和文で作成し, 添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	150,000円	
	使用した助成金額	150,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	旅費(航空賃を含む交通費, 宿泊費, 日当)の一部	87,411円
		参加登録料	62,589円 (545USドル)
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 若手研究者が国際会議で発表する機会を強く後押していることを本助成により感じました。特に、募集時期が年2回に分かれているため、不安定なポジションにあるポスドク研究員でも積極的に応募することができました。また、会議直前に会場が変更になったことにより宿泊施設を手配し直す必要があったのですが、助成金のおかげで無事に対応することができました。今後も様々な立場にある若手研究者の研究発表をサポートしていただければと思います。本当にありがとうございました。		

成果の概要／栗田和紀

平成 28 年 8 月 15 日から 21 日にかけて中華人民共和国（浙江省杭州市）で開催された第 8 回世界爬虫両棲類学会議（The 8th World Congress of Herpetology）に参加した。世界爬虫両棲類学会議は、爬虫類や両棲類の研究に関する国際的な理解を深め、研究者間の交流を促進する目的で開催されている。1982 年以後 3～5 年ごとに世界各国で開催され、今回は東アジアで初の開催となった。今回は約 55 ヶ国から約 700 名の参加者（見込み）が集い、38 のセッションにおいて口頭発表とポスター発表が行われた。また、会期中にはエクスカージョンやオークションなども企画されていた。

私は本会議において「Taxonomic review of Chinese skink (*Plestiodon chinensis*) and a reassessment of two subspecies in Taiwan by molecular and morphological investigations」という演題でポスター発表を行った。東アジアに生息するトカゲ属の種分類について現在見直しを進めており、本発表はそのうちのシナトカゲの分類学的問題についてである。シナトカゲは中国大陸や台湾、朝鮮半島、そしてそれらの周辺離島にまたがって生息しており、東アジアのトカゲ属の中では最も広い範囲に分布する種類である。そのため、地域ごとに異なった形態的特徴をもつ集団が存在し、それらは亜種として区別されてきた。しかし、その分類学的妥当性はほとんど検証されてこなかった。そこで、まずはシナトカゲに関する分類学的研究史をレビューし、次に台湾とその周辺島嶼に生息する 2 亜種について遺伝学的・形態学的アプローチにより再検討した。

ポスター・セッションは 17 日の夕食後夜 7 時半から行われた。会場ではアルコールが提供され、参加者はお酒を片手に和やかなムードの下で活発な議論を行っていた。私の発表は開催地を含む東アジア地域に広く分布するトカゲを取り上げたこともあり、台湾や中国、韓国の研究者に特に興味をもってもらえたようである。ポスター発表は演者と聞き手が直接対面しその場で議論を展開できることが利点の 1 つであり、研究のアピールと情報交換を兼ねて今回はあえてポスター発表に挑戦した。実際に言語の壁をあまり気にすることなく説明することができ、また逆に興味のあることを聞いたりすることができた。特に、今後の発展性を期待できる議論を行うことができたのは大きな収穫であった。気づけば 3 時間近くも経っており、有意義なポスター発表の時間を過ごすことができた。

今回の会議は当初予定されていた会場が 20 カ国・地域首脳会議の影響で開催 2 日前に変更になるなど不穏な空気で幕を開けた。しかし、会期中は目立った混乱はなく、国際会議に参加しなければ得られない多くの収穫があったと思う。前回に続き 2 回目の参加となった今回は、勝手が分かっていることもあり落ち着いて会期中を過ごすことができた。そのため、世界中の研究発表を通して様々な情報を収集することができた。中でも、9 名の研究者による基調講演は印象的であり、研究内容そのものにとどまらず発表のスキルについても参考になることがとても多かった。また、今回は開催地であるアジア地域の発表が目立ち、馴染みのある対象動物に関する様々な生物学分野の内容に興味深く聞くことができた。さらに、前回の会議には見られなかった最新の研究手法を積極的に取り入れた研究例もあり、自分はまだまだ限られた視野のなかで研究を行っていることを強く感じた。

今回の会議では多くの参加者と交流をもつ機会にも恵まれていた。上述のポスター・セッシ

ョンに加えて、セッション間の休憩時間や夕食時などでも時間を共有することができ、新たな知り合いを作ることもできた。会場がホテルの一部と限られた場所で行われたこともあり、会期中には頻繁に参加者と顔を合わせることができる会議であった。また、これまでに交流のあった海外の研究者や学生らとの交流をより一層深めることができた。特に、これまでの海外調査で協力してくれた現地の学生らの研究内容を具体的に知ることができたことは大きかった。研究テーマについては知ってはいたものの、まとまった内容を知るのは今回が初めてであり、とても刺激を受けることができた。今後はお互いの研究を含むより深い話題を介してネットワークを築くことが期待できそうである。

本会議に参加し、ポスター発表と有意義な情報交換を行う機会を与えていただいた京都大学教育研究振興財団には心から感謝いたします。本当にありがとうございました。